

上下あわせて2000ページ超の大著だし、お値段もお値段なので躊躇（ちゆうちゆう）しがちだけれども、読みはじめると、どんどん進む。上巻では主として1960年代半ばからはじまる大学闘争が、下巻では高校闘争、ベ平連、ウーマンリブ運動などのほか、内ゲバや連赤事件を通じて叛乱（はんらん）が終息していく70年代までが、豊富な資料を通して描かれる。

60年代に生まれた著者らしく、この種の本にありがちな「あの時代」を懐かしむ暑苦しさはまったくな



斎藤 美奈子

し。「あの時代」の若者たちの叛乱は、政治運動ではなく、むしろ表現行為としての側面が強く、一言でいえば「高度経済成長に対する集団摩擦現象であった」というのが著者の一応の結論である。彼らはたしかに失敗したが、当時と同様の閉塞状態（へいそく）にあるいま、その失敗から何を学ぶかが問われている。当事者、あるいは当時を知る世代には不満も異論もあると思うが、全共闘より下の世代である私には、きわめて納得がいった。